

75. 徳島県三好市東祖谷落合集落の空間構成の調査

0910920084 二宮健一
指導教員 市川尚紀 准教授

落合集落 重要伝統的建造物群保存地区 空間構成 里道(赤筋道)

1. はじめに

現在、わが国には約 63,000 もの平地を除いた中山間地集落が存在している。中山間地集落は、その地形と自然環境に合わせた独特な空間構成となっている。

徳島県三好市東祖谷落合集落(以下、落合集落)は、徳島県西南部、高知県との県境に位置した山深い地域にある(図 1)。2005 年に国の重要伝統的建造物群保存地区(以下、重伝建地区)に指定された。重伝建地区は東西約 750m、南北 850m、面積約 32.3ha の範囲であり、地区内の高低差は約 390m にも及び急傾斜地に集落を形成している。

東祖谷落合 伝統的建造物群保存対策調査報告書では、歴史的景観を守るために、技術的課題や保存計画の基本方針などが整理されているが、敷地割りや里道(赤筋道)については詳しく記載されていない。

そこで本研究では、落合集落を対象として、伝統的民家の間取りと、敷地形状の変化内容・継承傾向、里道(赤筋道)と民家との集落形成の関係性を明らかにすることを目的とした。調査概要を表 1 に示す。

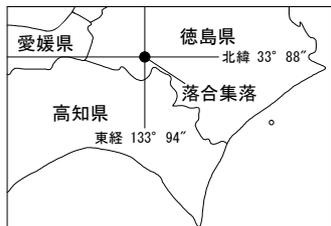


図 1 落合集落の位置

表 1 調査概要

方法	実測	ヒヤリング
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・民家の間取り ・敷地割り ・多機能環境測定器で集落内の気温、湿度、風速を測定 	<ul style="list-style-type: none"> ・住まい方の工夫 ・気候特徴 ・交通アクセスなど
期間	2012年6月27日, 9月2~4日	

2. 調査地概要

落合集落は、剣山の西斜面から流れる祖谷川の合流点に開けた集落で、急斜面という過酷な地形条件である。敷地形状、建物配置も独特で、現在でも茅葺き民家



写真 1 落合集落全景

が残っており、斜面に立地する伝統的民家や石垣などで構成される独特な景観を形成している(写真 1)。集落の起源は明らかになっていないが、平家の落人伝説や開拓伝承などが祖谷地方には残っている。

3. 集落の空間構成

3.1 集落の配置構成

集落の民家は計 67 戸あり、最も低い位置にある民家と最も高い位置にある民家との高低差は約 250m もある(図 2)。

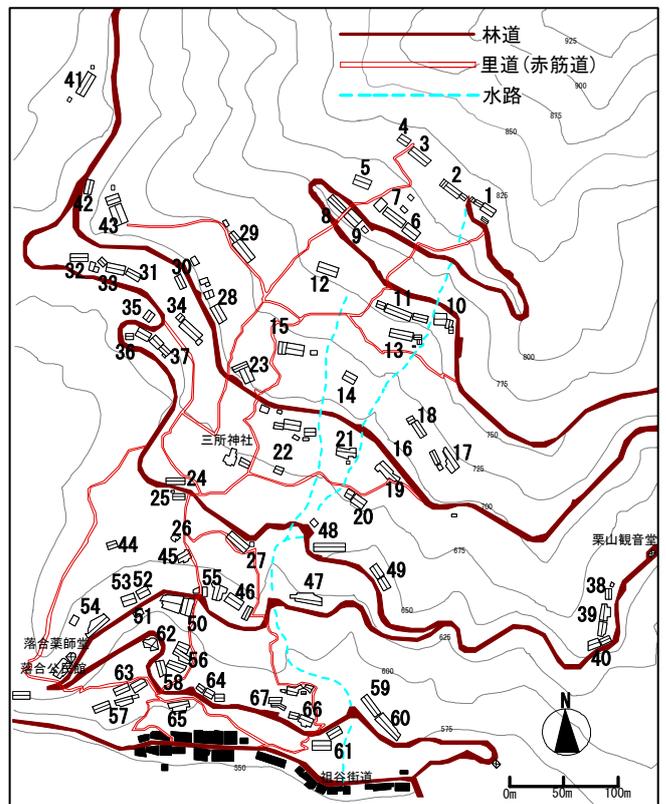


図 2 落合集落配置図

3.2 里道(赤筋道)の現状

峠から川へと下る里道と、等高線に沿って通る里道(赤筋道)が地区内に縦横に設けられている。里道(赤筋道)を支える石垣などは少子高齢化、自動車道建設等により、使用されず、消滅しつつあるものもある。また、コンクリートで舗装されているところもあり、生活道として今も利用されている。祭りやお盆などの前に、路面や石垣

の補修、草刈りなどがなされている。

4. 民家の空間構成

4.1 敷地の規模と形状

敷地幅は最大約 60m、最小約 17m であった。敷地の奥行きは最大約 24.8m、最小約 10.5m であった(表 2)。伝統的な屋敷の形状を維持している屋敷地の幅は平均約 30m、奥行きは平均約 13m となっている。

表 2 敷地の規模

奥行き(m) 幅(m)	10~15	15~20	20~	合計
15~30	1,3,5,6,8,12,14,16,17,19,20,24,25,26,27,37,52,53,55,61,62	9,18,21,45,47	10	27
30~50	7,13,15,23,34,43	2,29,30,32,33,35	46	13
50~	11,22	48,59	41	5
合計	29	13	3	45

敷地形状の変化は、「車道沿いでない屋敷地」「車道沿いの屋敷地」に分けられる(表 3)。斜面に屋敷地を造成しているため、陽がよくあたる外庭の空間は日常生活のなかでも貴重な空間である。ヤマトとは、土地の不足を補うために、外庭と水平に石垣の上に張り出して棚をつくり、その上に土を置いて前庭を広くしている事例である。

表 3 敷地形状の変化

	変化内容		戸数
	場所	方法	
車道沿いでない屋敷地	前面拡張	石垣	6
		コンクリート(周囲の拡張有)	2
		ヤマト	1
車道沿いの屋敷地	敷地前面が車道と同じ高さ	4	
	敷地前面が車道より低い	7	
	敷地の分断	1	
合計			21

4.2 民家の構成要素

民家の構成は、「主屋」「納屋」「隠居屋」の 2 棟または 3 棟が谷側を正面にして、等高線に沿って並べ、前面に農作業場を設けている。重伝建地区には、江戸時代中期から末期にかけて建てられた主屋が多く残されており、耕地や神社、石垣、里道などの集落環境と一体となった歴史的風致を良く伝えている。

屋敷地の構成は、まず屋敷地の形状で屋敷構えが大きく決まり、建物配置、さらに屋敷周辺の環境が要素となって屋敷地の景観を形成している。特にこの集落では、斜面に屋敷地がつくられているので等高線に沿って細長い敷地形状が必然的に建物の配置を決定づけている。屋敷地は、前庭が狭く農作物を干すのにスペースが足りないため、一般には木柵を組んでいる。

建物配置は、「①並列 3 棟並び」「②並列 2 棟並び」「③建物間に距離がある」「④ 1 棟のみ」「⑤例外・不明」に分類することができる。敷地幅が長いほど、建物の数も多く、伝統的な屋敷構えとなっている(表 4)。

表 4 敷地幅と建物配置パターン

建物配置 幅(m)	①3棟並び	②2棟並び	③距離	④1棟のみ	⑤不明	合計
15~30		1,3,8,9,10,17,19,20,21,27,37,57		5,6,12,14,16,24,25,26,45,47,52,53,55,61,62		27
30~50	2,13,29,33,34	15,23,43	30,32,35		7,46	13
50~	11,22,41,48	59				5
合計	9	16	3	15	2	45

4.3 民家の間取り

この地方の伝統的な間取りは、下記の 3 つに分けることができる。

- ①横一間取り・・・土間と床上一室をもつ間取りである。
- ②横二間取り・・・土間と床上二室を桁行方向に並列する間取りである。この間取りは、独立したネマをもっておらず、ザシキの廻りで寝るのが普通であり、この形式は江戸時代を通じて維持されて来ている。
- ③中ネマ三間取り・・・横二間取りの土間に接する部屋の後部に、寝室に区画したネマを独立させた間取りである。

長岡家(No. 11)は伝統的な民家である。敷地幅は約 60m、敷地の奥行きは約 11m だ。間取りは中ネマ三間取り(図 3)で、敷地内 3 棟並びである(図 4)。



図 3 長岡家平面図

写真 2 長岡家外観

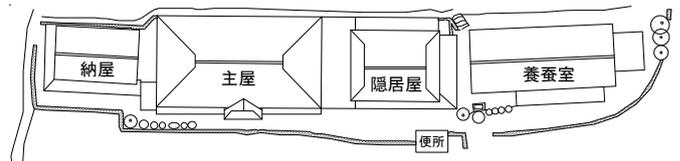


図 4 長岡家配置図

5. 結論

①里道(赤筋道)は、ほとんどの民家につながり、現在も生活道や儀礼時に利用されているが、消滅傾向にある。里道(赤筋道)と水路が通っているところは、居住地となっているところが多い。また、非居住地にある里道(赤筋道)は、現在は危険なためほとんど使用されていない。

②敷地内 3 棟並びまたは敷地内 2 棟並びは、伝統的な建物配置である。並列並びの建物配置は集落の北側および中心部に多い。伝統的な配置形態ではない 1 棟のみが建つ屋敷は、集落の南側に多い。敷地幅は、並列並びの建物配置だと広くなり、1 棟のみだと狭くなる。

参考文献

1) 東祖谷山村伝統的建造物群保存対策調査委員会: 東祖谷落合 伝統的建造物群保存対策調査報告書, 東祖谷山村教育委員会, 2003. 3
 2) 小嶋雅代ほか 3 名: 徳島県祖谷地方の山間集落における景観保存に関する研究 その 1 落合集落の概要と石垣の保存状況(風景と景観, 農村計画), 日本建築学会近畿支部研究報告集, 計画系(42), pp. 465-468, 社団法人日本建築学会, 2002. 5